

一 次の①～⑩の——の漢字の読みをひらがなで答え、カタカナを漢字に直しなさい。

- ① 本音と建て前が違いすぎる。
- ② 敵を倒す策略を練る。
- ③ キケンを承知で中に飛び込んだ。
- ④ ショウミ期限が切れる。
- ⑤ テンケイ的な現代人の行動だ。
- ⑥ クレンを続けられでもできるようにする。
- ⑦ 病気をナオす。
- ⑧ 自分のカンジュ性くらい自分で守れ
- ⑨ 人事を尽くしてテンメイを待つ
- ⑩ ダイドウ小異

二 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。(問題に字数制限のある場合は、すべて句読点・符号をふくむものとする)

①日本を訪れる外国人が不思議がることのひとつは、ほとんどの通りに名前がないということである。特に欧米の都市ではどのような小さな通りにも名前があり、建物に番号が振つてある。知らない町でもたとえば「ワシントン通り三十八番地」と告げれば、タクシーの運転手は理解する。通りの名と番号さえわかれば、はじめて訪れる人でもなんとか目的地に到達できるのだが、日本の場合には必ずしもそうではない。主要な道路には名があるが、いったん路地に入れば頼りになるのは番地だけである。日本の住所の番地は、②郵便の配達には十分でも、観光客にはほとんど役に立たない。

a 自分の家をはじめて訪れる友人に、行き方を説明するとき、欧米の町ならば通りの名前と番号さえ告げれば、地図の助けを借りてやって来ることができる。日本の場合には、そうはいかないだろう。目印となる建物や看板など、具体的な対象を引き合いに出して、どこをどの方向へ曲がるのかをある程度説明しなければ、まず迷ってしまう。

b 欧米の町での通りの名と番号は、そのままそこへ行くための手段として誰にでも使うことが可能だが、日本での住所につけられている番地は、そのようにできてはいない。少なくとも、カー・ナビゲーション・システム(人工衛星からの電波を車で受信し、地図上に位置を表示する電子装置)、c 「カーナビ」が普及する(広く一般にゆきわたる)までは、番地だけで順路を理解することは、難しかった。

欧米の人にとって不思議なのは、日本人が③それでもふつうに生活している、ということである。すべての通りに名があり、すべての建物に番号があるということは、誰にとっても明確な一種の法則のようなものである。では日本の町では誰もが迷うかといえば、そんなことはない。通りに名前がついていなくても、だいたいの行き方を聞けば、なんとななるものである。わたしたちは駅前から家までの順路を説明することに慣れているし、それを聞くほうも慣れている。

わたしはフランスと日本の両方に住んだ経験から、それぞれの国の都市での住所における以上のような違いが、それ

を使う人間の感覚にもちよつとした違いを生んでいるのではないかと思うようになった。ごく一般的に言えば、日本人は住所をイメージに変換して伝えることがうまいし、それに慣れているのではないかと思う。道路がどのような道路であるのか、角に何があり、そこを曲がると何が目に入るのかと、わたしたちはごく日常的に、道順を視覚化している。道順をイメージにして理解しているのである。

すべての通りに名前がついているような都市では、必ずしもそのような必要がない。ある特定の場所は「名前＋番地」という記号と一対一対応しているから、地図さえあれば見当がつく。道端で誰かに聞くとともに「名前＋番地」だけで通じるので、あえてイメージを伝えなくてもよい。

欧米の人が「d」としての地図を頼りにするとすれば、日本人はある特定の場所へ行こうとするたびに、頭のなかにイメージとして地図を描いているようなものとも言えるかもしれない。あまり図式化してはいけませんが、手順をイメージによって伝えるということが、日本人は得意なのではないかと思うのである。

同じことが取り扱い説明書やマニュアル（機械などの使用説明書）についても言える。これは料理の本でも手芸の本でもそうだが、日本で作られているこれらの「説明書」は、④外国のものと比較して、非常にわかりやすい。それはひとつひとつの手順が、写真やイラスト入りで説明されているからであり、その方法はそう簡単に真似のできないほど、きめの細かいものである。

たとえば同じようなドレスを作るための解説書を比較すると、欧米のものと日本のものでは、かなり違う。前者が基本的に可能なかぎり言葉で説明しようとするところを、日本ではむしろイメージを使ってわかりやすく伝えようとする。手順をイメージにするのは、それなりの工夫と経験が必要な技術であり、日本はそれを長いあいだ蓄積してきたと言えるだろう。これは日本の文化としては日頃あまり指摘されないことだが、「イメージを使って伝える」ということは、ひとつの知恵であり技術でもある。

ただし⑤これからもそうであるとはかぎらない。たとえば電話番号や住所を入力すると、地図と音声と道順を伝えて

くれるカーナビ。機械がやってくれるので、正確であるし、何より便利である。だが同時に、それによってわたしたちは道順からイメージを作り上げるといふ努力をしなくなるわけだから、どこかで失うものもあるかもしれない。一昔前までのドライバーと現在のそれでは、運転の技術には差がないかもしれないが、地図を読みそこから想像するという能力には、もしかすると違いが出てきているかもしれない。

わたし自身は地図を読むのが好きだが、旅にはできるだけ持ってゆかない。見知らぬ人に道を聞き、そしてときどき迷うほうが面白いと思っている。だが地図に載っている地名が現実から消えていたら、これはどうしようもない。保存すべきなのは、歴史的記念物でも遺跡でもなく、地名だったのかもしれないと思うのは、日本ほど多くの地名が消えてしまった国も珍しいからだ。

統廃合を繰り返す行政上の理由から、古い地名がなくなり、そして聞いたこともない新しい呼称（呼び名）が生まれている。たとえばいかなる意味で、四国中央市（愛媛県にある市の名前）は地名だと言えるのだろうか。土地と名の関係が変わってしまった時代というよりは、もはや⑥地名を必要としない時代へ移行しつつあると言えるかもしれない。その移行は東京や香港といった都市の変化ではなく、「現在の地球」という惑星規模で起きている、文明単位の変化として捉えなければならぬ質のものである。

テレプレゼンスは、「現在の地球」という名の演算（数式の示すとおりに数値を計算すること）であり、現実空間のなかの定位を必要としない。わたしたちは地名のないひとつの空間にいる。インターネットも携帯電話も、そしてGPS（人工衛星の発する電波によって、地球上の現在位置を正確に測定するシステム）もそうである。「四国中央」が地名となるのは、土地が歴史や記憶と切り離された別の位相（領域）に入っているからだだろう。その位相とは「いま、どこ？」という質問が四六時中あらゆるところでリピート（繰り返すこと）される社会の、異様さを含んでいる。そこに「もはやどこにいても同じこと」という地名の無意味化を読み取る必要があるだろう。

地球上のあらゆる場所を名づけてしまい、名づけることによって惑星を支配するにいたった人間はいまその地名を部

分的にしる、捨てる段階へと進みつつある。消えゆく地名はその徴候（きざし）かもしれない。

（港 千尋著『芸術回帰論』一部改変）

問一——①「日本を訪れる外国人が不思議がること」とはどのようなことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 外国では、通りの名と建物の番号で目的地に到達できるのに、日本のほとんどの通りには名前がないため、目的地にたどり着く方法がわからないこと。
- イ 外国では、どのような小さな通りにも名前があることがあたりまえのことなのに、日本では主要な道路にしか名前がないこと。
- ウ 外国では、すべての建物に番号がふっており、それを使って目的地に行くことができるのに、日本では通りの名前を利用していないこと。
- エ 外国では、通りには名前が、建物には番号があるものののに、日本ではそうっていないことを日本人が気にしていないこと。

問二——②「郵便の配達には十分でも、観光客にはほとんど役に立たない」とありますが、なぜ「役に立たない」のでしょうか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本の住所の番地は、そのままそこへ行くための手段として、誰にでも使えるようにはできていないから。
- イ 日本の住所の番地は、「カーナビ」には向いているが、観光客を意識して付けられているわけではないから。
- ウ 日本の住所の番地は、路地などに名前がつけられていないため、目印となる建物や看板を覚えておかないと使えないから。
- エ 日本の住所の番地は、住所をイメージに変換して伝えることがうまく、日本人に合うように作られているから。

問三 本文中の a c に入れるのにふさわしい語をそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。（同じ記号を二度以上使ってはいけません。）

- ア いわゆる
- イ つまり
- ウ おそらく
- エ しかし
- オ たとえば

問四 — ③「それでもふつうに生活している」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア すべての通りに名があり、すべての建物に番号があるという明確な法則がなくてもかまわない、ということ。

イ 駅前から家までの順路を説明することには慣れているし、それを聞くほうも慣れている、ということ。

ウ 角に何があり、そこを曲がると何が目に入るのか、という道順を日常的に視覚化している、ということ。

エ ほとんどの通りに名前がついていなくても、道に迷うことなく暮らしている、ということ。

問五 本文中の d にあてはまる語句を、本文中のこれより前から探し、抜き出して答えなさい。

問六 — ④「外国のものと比較して、非常にわかりやすい」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 外国人はイメージでものごとを考える習慣が身についていないが、日本人は手順をイメージにして考えることが身についているから。

イ 外国人はイメージで考えなくてもよい地図を使っていたが、日本人は頭のなかにイメージとして地図を描く習慣が身についているから。

ウ 外国のものはできるかぎり言葉で説明しているが、日本のものは写真やイラストなどを使って、きめ細かく手順が説明されているから。

エ 外国のものはできるかぎり言葉で説明していてわかりやすさを求めないが、日本のものはイメージを使ってわかりやすく伝えようとしているから。

問七 — ⑤「これからもそうであるとはかぎらない」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地図を読みそこから想像するという能力は、カーナビが普及する前と普及した現在とでは差がうまれているかもしれない、ということ。

イ 正確で便利なカーナビを使用するようになってからも、道順からイメージを作り上げるという努力をする人と、そうでない人がいる、ということ。

ウ 機械が道順を伝えてくれる時代になってからも、「イメージを使って伝える」ということが、知恵や技術として評価されるかどうかは不明だ、ということ。

エ 人間の代わりに機械が視覚化して伝えてくれる時代になってからも、そうした知恵や技術を人間が保ち続けているかどうかかわからない、ということ。

⑥「地名を必要としない」のはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 統廃合を繰り返す行政上の理由から、古い地名がなくなり聞いたこともない新しい地名が生まれているので、地名を聞いてもそこがどこかわからなくなってしまうているから。

イ 地名を必要としない時代へと移り変わっていくのは、東京や香港といった都市の変化ではなく、「現在の地球」という惑星規模で起きている、文明単位の変化だから。

ウ インターネットや携帯電話やGPSといった現在の文明では、現実空間のどこにいてもたちまちつながってしまうので、実際にどこにいないかは関係ないから。

エ 地球上のあらゆる場所を名づけてしまい、名づけることによって惑星を支配するにいたった人間が、その地名を捨てる段階へと進みつつあるので、地名は消えゆく運命にあるから。

③ 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。（問題に字数制限のある場合は、すべて句読点・符号をふくむものとする。）

いつもは静かな向かいの八幡社から、祭りのざわめきが絶えず聞こえてくる。久吉の父又平は、片膝を立てて茶碗酒をあおっていたが、

「ふん、祭りか。①おもしろくもねえ」

と、妻のりよを見た。りよは昼食の後片づけをしながら屈託なげに言う。

「さつきから、同じことばかり言って、いくらおもしろくない言うてみても、仕方がないわ。戻らんもんは戻らんな」
「大体、お前がそんなのんき者だで、あんな久吉みたいな息子が出来たんや」

「そうかも知れせん。けどな、久吉だつてあれで結構近所の皆さんに、かわいがられとるでな」

りよはのんびりと答える。目鼻立ちのぱちりとした明るい顔立ちだ。久吉の妹品が、父親似の細い目で、ちらちらとその二人を見ながら折り紙を、膝の上で折っている。品も今日は晴れ着を着て、いつもより愛らしい。又平は、むすつとして、立てていた膝を小刻みにゆすりはじめた。膝をゆするのは、決まっておもしろくない時なのだ。りよは気にもとめず、片隅の煤けた戸棚に、品の食べ残した煮を入れた。小さな神棚の下には久吉の蔭膳（旅などに出た人の安全をいのって、留守宅で用意して備える食膳）が据えてあつて、その膳の上には、赤飯、鰯の煮付け、煮などが並べてある。りよは蠅のついてる蔭膳を見て、ちよつと考えてから、その蔭膳のものも戸棚にしまい始めた。

境内で、わつと大きな歓声が上がった。草相撲が始まるらしい。

久吉の家の前には、幅一間半（約二・七メートル）程の澄んだ小川が流れている。裏手の山から流れてくるのだ。その小川の向こうが境内であつた。境内にはうばめがしや五葉松などのこんもりと茂る森があり、その小高いあたりに社があつた。

久吉は、又平に叱られると、すぐこの境内に逃げて行く。久吉にとってこの境内は、わが家の庭のようなものであった。祭りの度に、久吉は宮司の手伝いをしたものだ。そのことを又平は思い出しているのだ。

「あの餓鬼め。帰ってきたら、肋の一本もぶち折ってやるわ」

又平は音を立てて、茶碗をちやぶ台の上においた。

「おや、お前さん、久吉の肋を折ったら、何かいいことになるのかねえ」

りよは相変わらずのんびりと言いながら、小さな箱火鉢にかけてある鉄瓶の湯を急須に注いだ。

「何を言う、この馬鹿が。親にこんな心配をかけよった息子だで。畜生！ 帰ってきてみい。一步も家になんぞ入れてやらんぜい」

久吉が家を出てからというものの、又平は同じ怒りをくり返してきた。

品が折り上がった鶴を口に当てて、ふーっと息を吹き入れた。りよはむっちりとした手を伸ばして、

「おや、これはうまく折れたでないか」

と手にのせた。又平が怒鳴った。

「②なんだ品！ 鶴じゃねえか。何でそんなもの折らんならん。飛んでいくもんなんぞ、見たくもねえ。しかし久吉も久吉なら、長助も長助だ」

「お前さん、御蔭参り（伊勢神宮の遷宮の翌年に、伊勢神宮に参拝すること）にはなあ、文句をつけられんで、神罰が仰山（はげしく）当たるでな」

「神罰う!?」

口を尖らせたが、又平は黙った。神罰という言葉は漁師の又平には、聞くだけでも恐ろしくひびくのだ。赤銅色の潮焼けした顔を、団扇のような大きな手でなでると、少し語調を変えて、

「なあ、おりよ。あの野郎は、帰らんつもりかのう」

「それがわしも心配でなあ。東屋の倅（むすこ）が、この春御蔭参りに行ったきりだでなあ」

「しかし、東屋の倅は十八だ。久吉はまだ十三やでえ」

「十三言うても、お前さん。あの子はもう大人だでな」

「大人？ なら夜遣い（夜、かくれて恋人のもとに行くこと）にでも行つたか」

「わからんでお前さん。とにかく、あんまりお前さんが口やかましいでな。それで久吉も逃げ出したかも知れんで」

「逃げ出した？ 俺が口やかましいからとな？ 俺の口やかましいのは、お袋の腹（はら）中からだ。今からなおせるかい」

「それじゃ仕方あらせん。お品、またお祭りを見にいかんのか」

「もう行かん」

品は淋しそうに壁に寄りかかって言う。

「どうして行かん？」

「兄さがないで、つまらん」

膝の上に、奴を器用に折りながら品が言う。

「兄さがないなくても、友だちがいるだろうが。子供が祭りも見んと、壁にへばりついてるもんでないで」

りよは櫛で頭を掻いた。

「だって……」

品はもの言いたげにりよを見た。

「だって何や」

「だって……」

品は同じ言葉をくり返す。品は久吉のことより、実は自分の晴れ着のほうがかかっているのだ。品は今朝ほど、境内を出て行く祭りの行列を見た。山車を曳く女の子たちは、長い袂の晴れ着を着ていた。

(うちの着物ときたら……)

品は、きわだつて華やかな琴の振り袖を目に浮かべた。品の晴れ着は三年前の七つの時につくってもらった晴れ着なのだ。年々少しずつ上げをおろして、今年は全部おろした。が、膝がようやく隠れるほどの短さなのだ。これではふだん着と同じ長さだ。その上、賑やかな久吉もいない。品は折り上げた奴を、ちやぶ台の上に放り出した。

「だって、だってと、何を言いたいのか」

徳利から、一人茶碗に酒を注いでいる又平をちらりと見て、りよは言う。

「だって、母さま。うちの着物はこんなに短うなつて」

品は立ち上がつて着物を見せた。りよも又平も黙った。

「みんな長い袂を着ているのに。うちだけやで。こんなに裾も袂も短いのは」

「……………」

「お琴やみんなは、そりやあきれいな着物を着てるでえ」

品はベソをかいた。

「ほんまになあ」

品に言われなくても、りよは気になつていたのだ。だが、少しばかりのほま、ち(へそくり)を、久吉が茶簞司の引き出しから御蔭参りに持ち出してしまったのだ。と、突如又平が怒鳴った。

「品！ お琴は船頭の娘やでえ。船主の孫やでえ。俺たち漁師とはえろう身分のちがいだ。おなじかつこができるか。そんなことが、わからせんのか」

品は黙つて、再び坐った。りよは、今朝品に晴れ着を着せた時、品が黙つて裾を見ていたことを知っている。しかし品は、何も言わずに境内に出かけて行つたのだ。

りよは品の頭をなでながら言つた。

——

——

「あんなあ、お品。父つさまの言うことは本当だでな。うちは貧乏や。今年はべべをつくつてやれんかったがなあ、来年はきつとつくつてやるでな。それまでしんぼうせいな。人間しんぼうせんと、ろくな者になれんでな」

りよは諄々と(ていねいに)くり返し教えいましめるさま)言う。

「うん。うち、しんぼうする」

品は素直にうなずいた。品の目からぼろりと涙が落ちた。品はしんぼうには馴れているのだ。又平は③見て見ぬふりをして、酒をがぶりとんだ。

境内で、また歓声が上がった。草相撲がaたけなわらしい。

懐かしい八幡社の森が、家並みの向こうに見えて来た。うばめがしの葉が、折々さざ波のように風が動くのが見える。

久吉は胸の痛くなる思いがした。あとひとつ走りでわが家である。

だが、久吉は(b)と歩いて行く。やがて久吉は、曲がり角に来た。そこを左に折れると、あと二丁(二百二十メートルほど)と歩かずにわが家に着くのだが、④久吉は小川の縁にしゃがみこんだ。澄んだ川底に青い藻がゆらいでいる。ちよろりと動いた影は小鮒だ。

「困つたなあ」

久吉は思わず呟いた。

久吉は先程、小野浦の町に入って初めて、今日が八幡社の祭りであることに気づいた。久吉は今日が何日であるかを忘れていたのだ。久吉は喜んで、道々出店を見、行き交う人を見た。僅か一か月しか離れていないのに、もう何年も離れていたかのように、見るものすべてがひどく懐かしかった。が、ある呉服屋の店先で、立ちどまってあたりを見ていた時、いきなり水をかけられた。乞食だと思われたのだ。ふだんならともかく、みんなが晴れ着を着ている祭りの日に、垢と埃にまみれた久吉の姿は、乞食に見えたのかもしれない。久吉は不意にがっくりとし、家に帰ることが俄に不安

になった。父の怒った顔が、まざまざと目に浮かんだ。

こうして久吉は今、曲がり角まで来たのだが、何とも気が重い。久吉はじつと小川の流れに目をやりながら父の怒りを考える。小川を見ている久吉の耳に、突如境内から歓声が聞こえた。

「あ！ 草相撲をやっとる」

八歳の時から、毎年久吉は草相撲に出て来た。子供の草相撲は大人の相撲の先に始まる。

（そうか！ したら家はからっぽだな）

相撲好きな父は、毎年祭りには子供の草相撲も見る。きっと今年も見ている筈だ。品も当然遊びに出ているにちがいない。母のりよだけなら、さほど恐れることはない。

久吉は立ち上がった。ひどく腹が空いている。

（祭りのごちそうがあるやろな）

久吉はにこつとした。祭りには決まって、赤飯に上等の魚がつく。漁師はしていても、ふだんは滅多に魚は口に入らない。たまに鰯が食膳にのぼるくらいのものだ。

（鰯かな。鰯かな）

久吉は心も軽く立ち上がった。茅葺きのわが家がすぐそこに見えて来た。軒が深く、窓の小さな、二十坪ほどの家だ。その手前に、門構えも立派な、瓦葺きの隣家がある。船頭嘉市の家だ。隣家の前まで来て、久吉はまた立ちどまった。

（もし、父つまがいたら……）

父の又平は手が早い。頭にこぶができたことも、二度や三度ではない。

（まあ、仕方あらせんな）

久吉は自分に言い聞かせてみる。

（けどなあ……）

久吉はためらう。

（長助のことを何と言ったらええかなあ）

江戸に行ったと告げたなら、叱られるのは久吉だ。長助は早くにふた親を亡くし、船主源六の家に住みこむまでは、又平に育てられていた。

（父つまあ、怒るぞう。なんでとめんかったと、怒鳴るやろなあ）

久吉の家の向こうには、家が一軒あるだけで、だらだらと山道にかかる。

（はぐれてしもうたと言ったらええやろか）

（いやいや、はぐれたなんぞと言ったら、なおのこと叱られるやろな）

のんきな久吉も、わが家を目の前に、さすがに思案顔になる。長助のことが、こんなに重荷になるとは思わなかった。（こりや、えらいことになったわ。けど、悪いのは長助だ。俺はとめたでな）

腹がくーっと鳴った。のどもからからに乾いている。

（どっちにしても叱られるのは俺や）

久吉は吐息をついて、そっと家に近づいた。と、戸口まで行かぬうちに、

「あの久吉の野郎！」

いきなり、窓から又平の声が聞こえた。久吉はぎよつとした。

「帰って来てみい！ 只じゃおかんでな！」

（どうしよう）

久吉は窓の下にそつと屈んだ。と、何やら又平に答える母の声がした。

「なにいつ!? 何だとう！」

潮風で鍛えた又平の声が、びんびんと外までひびく。久吉は首をちぢめて、

「父っさまあ。神罰が当たるでえ」

呟つぶやいてみる。りよがまた何か言う声がした。と、又平が、

「おりよ、久吉はもう戻らんでえ。あれは馬鹿者だでな」

（父っさま、戻ったでえ）

久吉はにやっとした。父の怒声には馴なれている。聞いているうちに、久吉は次第しだいにその怒声どせいさえ懐なつかしくなった。

（ああ、腹がすいた）

久吉はひよろひよろと立ち上がった。途端とたんに、

「久吉も久吉なら、長助も長助だ！」

と、怒声が飛んだ。久吉は、再び首をちぢめた。が、

（そうや！ 隣のとなり小母おはさまに頼たのもう。隣の小母さまに詫わびてもらお）

久吉は隣家の黒い塀へいを見た。船頭嘉市には又平も頭が上がらない。

（うまいこと考えついたわ）

久吉はたまに嘉市の使い走りをすることもある。特にその久吉を、嘉市の妻はかわいがり、

（久吉はほんまにおもしろい子や）

と、よく飴あめや麦あわこがしをくれる。久吉は急に元氣が出て、嘉市の家の門に入った。が、妙みょうにひっそりしている。裏うらに廻まわると、飯炊たきの女が出て来て、

「何や、久吉か。えらい汚きたらしいかつこして、今帰って来たんか」

と、驚おどろきの声を上げた。

「うん、帰って来た。たった今な。ところで小母さま、いるやろか」

「おかみさんも旦那だんなさまも、出かけて留守や」

「何や、留守か。困ったなあ」

「何が困ったね」

「小母さまに、うちの父っさまに詫わびを入れてもらおうと思つてな」

「詫わび？」

中年の飯炊たき女は、二重にくびれたあごを突き出すようにして、

「いかんいかん。誰だれが詫わびを入れたって駄目だめや。又平さんは朝から晩まで、お前まへのこと怒いかつとるだでな。とにかく早うお帰り。でもまあ、よう無事に帰って来たなあ。うちのおかみさんも、えろう心配していたわ」

言われて久吉は、仕方なく歩みを返した。久吉は再び、わが家の窓の下に屈くみこんだ。が、どうしたことか又平の怒声は聞こえない。何かりよと品の声がする。久吉はほっとした。又平が境内に遊びに行ったのかと思つた。品の声が少しした。

（しめた。二人つきりやな）

久吉はあけ放つた戸口をそつとのぞいた。家の三分の一は土間で、土間には鍬くわや鋤すきや漁具が並べてある。煮にの匂においもうまそうに漂ただよっている。久吉は、

「あのう……」

と、及び腰おしになり、

「今、戻りました」

と小さな声で言つた。

「あれ？ 今誰か、なんぞ言つたか？」

又平の訝いがる（あやしむ）声がした。久吉はギリとした。が、今更いまさら逃にげることにならない。足を一步土間に踏ふみ入れて、久吉は声を励はげまし、

「あの、父っさま、今……」
言いかけるや否や、

「何だ!? 久吉でないか!」

「何や! 久吉の声やないか」

又平と、りよの声が同時にした。と思うと、ころがるように又平が土間に降り、

「久吉かあーっ!」

と、いきなり久吉の体を、その逞しい腕の中に抱きしめた。⑤久吉はきよんとした。

「久吉かあーっ! よう戻ったなあ」

痛いほどに又平は久吉を抱きしめ、不意に号泣した。

「久吉っ!」

「兄さ」

りよも品も飛びついて来た。

「父っさまあ!」

久吉も又平にしがみついて泣いた。と、

「この馬鹿があっ! この馬鹿があっ!」

と、又平は久吉の頭を、二つ三つ殴りつけた。

(三浦 綾子著『海嶺』一部改変)

問一——①「おもしろくもねえ」とありますが、どうして又平はこのように言ったと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祭りのたびに久吉が宮司の手伝いなどをしていたことを思い出して、さびしくなったから。

イ 御蔭参りに行ったきり一か月も戻ってないため、自分に心配をかけている息子に對し怒りを覚えているから。

ウ 妻のりよがのんき者であるがために、久吉みたいに祭りになっても家に戻らないような息子ができたと考えているから。

エ 自分は氣に入らない息子なのに、近所の人々にはかわいがられていると妻のりよが言い返してきたから。

問二——②「なんだ品! 鶴じゃねえか」とありますが、どうして又平は品の鶴に怒っているのでしょうか。三十字以上四十五字以内で説明しなさい。

問三 ― ③「見て見ぬふりをして酒をがぶりとのだ」とありますが、この時の又平について説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア りよの説得に素直にしたがう品をかわいく思うものの、お金がないためその希望をかなえてやれない自分にいらだち、酒に逃げています。

イ 自分自身は怒鳴ることしかできないが、りよの上手な対応によっていつもの素直な品にもどったので、内心ほっとしている。

ウ かわいい娘を泣かせてしまったことに心を痛めているが、今さらやさしい言葉をかけるのもためられるので、だまって酒を飲んでいる。

エ 新しくてきれいな着物を欲しがる品の希望を、お金がないためかなえてやることができないので、品が泣いていても余計な口をはさまずにいる。

問四 二重傍線部 a「たけなわ」の意味として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 終わりに近づいているとき

イ はじまったばかりのとき

ウ これからもっとも大切なとき

エ いちばん盛り上がっているとき

問五 (b) に当てはまる言葉として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いそいそ イ せかせか ウ のろのろ エ おずおず

問六 ― ④「久吉は小川の縁にしゃがみこんだ」とありますが、どうして「しゃがみこんだ」のでしょうか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一か月ぶりに帰ってきたものの、乞食と間違われるほど汚い恰好かっこうだったので、家に入れてもらえないかもしれないから。

イ 家に近づけば近づくほど、一か月も留守にしていたことをどう説明すればいいのかわからなくなり、不安になってしまったから。

ウ 僅か一か月しか離れていないのに、もう何年も離れていたかのように感じたため、どういう顔をして家に帰ったらいいか考え込んでしまったから。

エ 一か月ものあいだ家を留守にしていたので、さぞかし父に怒られるだろうと考えると、気持ちしづが沈んでしまったから。

問七——⑤「久吉はきよとした」とありますが、この時の久吉についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分を抱きしめ号泣する父の姿など、まったく想像していなかったのでおどろくと同時に、どう反応していいかわからなくなっている。

イ 境内に行つて留守だろうと思つていた父が出てきただけでなく、突然抱きしめられたため、びつくりして何も言えなくなっている。

ウ 父に怒られるだろうと覚悟を決めていたのに、突然抱きしめられるという予想外のできごとにあつけにとらわれている。

エ すごい勢いで自分に近づく父に恐ろしさを覚えたが、突然抱きしめられておどろくとともに、緊張感から解放されて気が抜けている。

問八 この文章を説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息子への心配を、怒つたり怒鳴つたりすることでしか表現できない父の不器用さに、周りの人々が振り回される様子がうまく描かれている。

イ 父とは対照的な行動をする母は、あらわれ方こそ異なるものの、親として息子を心配している点では父と変わりがなく描かれている。

ウ 家族に心配をかけているにもかかわらず、言い逃れることばかり考えている久吉のずる賢さが、素直な妹と比べて際立つように描かれている。

エ 祭りの様子をときおりはさむことで、家族がそろわないため暗くなりがちな一家の様子が、より読者に印象づけられるよう描かれている。

問題は、ここからです。

国語

(二期A)

解答用紙

受験番号
得点
*

一	
⑥ クンレン	① 本音
⑦ ナオ す	② 策略
⑧ カンジュ	③ キケン
⑨ テンメイ	④ ショウミ
⑩ ダイドウ	⑤ テンケイ

*

二		
問五	問三	問一
	a	
問六	b	問二
問七	c	
		問八

*	*	*
---	---	---

三				
問六	問三	問二		問一
問七	問四	45		
問八	問五	30		

*	*	*
---	---	---

*

*印のところには何も書かないこと